『古代アメリカ』16, 2013, pp.43-58

＜調査研究速報＞

# ニカラグア共和国チョンタレス地方における考古学調査

長谷川悦夫
（埼玉大学教育機構）

## 1. はじめに

著者は1998年にニカラグア共和国チョンタレス地方（Chontales、図1）で先スペイン期遺跡の踏査・測量調査に着手した[註1]。しかし、著者にたいして調査許可を発行したニカラグア政府（文化庁）と、地元自治体との間で調査許可の妥当性とその適用範囲についての見解の相違から対立が生じ、著者自身も現地マスコミなどから非難される事態となり、調査を中断せざるのやむなきに至った[註2]。それ以来、再度の調査を目指していたが、今年になり文科省科研費を得てようやく調査を再開し、4日間ではあるがフイガルパ（Juigalpa）市および、さらに100km離れたエル・アヨーテ（El Ayote）市で踏査を行った。本稿では、かつて収集して口頭発表で紹介を行うにとどまっていた資料に、本年収集したデータを付加し、調査速報として報告したい[註3]。

## 2. 研究の目的

ニカラグア共和国の先スペイン期の遺跡や遺物に関心が払われるようになったのは早い時期である。19世紀後半、既に遺跡や遺物の観察を含む旅行記［Squier 1860など］が記され、20世紀はじめにはロスロップがコスタリカ・ニカラグアで調査を行い、主として土器を扱った大著の報告書［Lothrop 1926］が刊行された。しかしながら第二次大戦後の調査・研究の進展著しいメキシコ、グアテマラ、ホンジュラスや南の隣国コスタリカに比べ、ニカラグアにおける考古学は低調であった。とくに1972年のマナグア大地震から、1979年の革命を経て、1980年代の内戦が終結するまでの間は、考古学調査には非常な困難を伴う時代であった。

1990年代に入り、国内の状況も安定し、外国からの援助や投資も増え、経済も復興していった。これにともない考古学調査の件数も増加したが、メソアメリカ南限とされるいわゆるニコヤ文化圏（Greater Nicoya：図1）を構成する太平洋岸が主要な調査地となり、内陸部や大西洋岸の調査は遅れている。

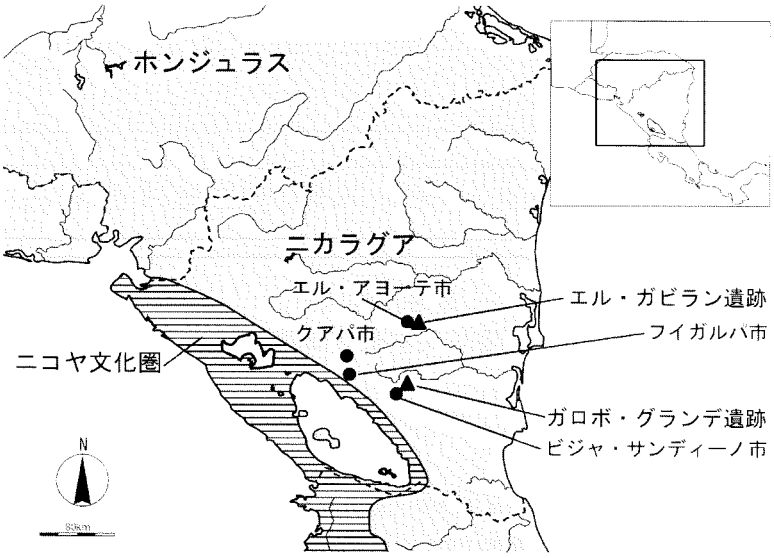


**図１　ニカラグア、調査地の場所**（註4）

ニカラグア内陸部のチョンタレス地方は、マウンド遺跡群と石造彫刻類の存在により以前から注目されてきたが、実際に科学的調査の手が入ったのは1980年代のフランス人考古学者のチームが最初であった［Gorin 1990; Rigat y Gorin 1993; Espinoza y Rigat 1994］。本研究はこのフランス人考古学者らの成果を踏まえて、当該地域のより詳細な先スペイン期の歴史を再構成することを目的とした。

チョンタレス地方を調査地に選定した理由は以下の三点である。(1) 太平洋岸の調査・研究の進展と内陸・大西洋岸の遅れという不均衡を是正し、盗掘、開発工事、耕作によって破壊され、失われ行く遺跡を記録に残すため、当地域での調査の必要がある。(2) 太平洋岸に比べ人口密度が低く、耕作より放牧が盛んなことから、遺跡が被った破壊の程度が軽い。また、大西洋岸のように熱帯雨林が卓越することがないので調査しやすい。(3) 比較的開発が進んだ太平洋岸とは異なり、マウンドの残りがよく容易に地表面に観察できる。それゆえセトゥルメント・パターン研究に適している。

著者の関心は、部族社会や首長制社会のモザイクだった先スペイン期の中央アメリカ南部を含む中間領域と、文明社会を生み出したメソアメリカ、アンデスという核アメリカの比較にある。その研究の一歩として、チョンタレス地方という一地域での人間居住開始からスペイン征服期までの先住民社会の発展の軌跡をあとづけることを目指した。土器の編年が整備され、遺跡の年代が決定できれば、中間領域における一地域の社会変化（社会的複雑性の出現）の様相とその要因、外部（北のメソアメリカや南のコスタリカ、パナマ、または南アメリカ）との交流というテーマに貴重な資料を提供できると考えられたからである。

## 3. 調査の概要

フランス人考古学者らの調査は大部分が河川沿いの低地で行われ、98遺跡が確認された。土器編年を確立するため3遺跡での試掘が行われ、編年の枠組みも提示されている［Gorin 1990］。著者ら

の調査ではこれを補うために、踏査地域の拡大による新しい遺跡の発見・登録を行うこととした。また、遺跡のマウンド配置にかんする正確な情報を得るために、平板測量によるマウンド配置図の作成を行うこととした。あわせて建築様式、建築シークエンスにかんするデータを得るために、マウンドの平面発掘を行うことを目指していたが、上記の事情により実現しなかった。

## 4. 調査の経過

チョンタレス県フイガルパ市およびクアパ（Cuapa）市周辺において15遺跡（1998年に13遺跡、2013年に2遺跡）で踏査を行った。うち10遺跡は新しく発見されたものであり、ニカラグア国立博物館考古学部門の遺跡台帳に登録された。各遺跡において、写真撮影と地表面の遺物（土器片、石器）の採集を行った。

重要な2遺跡、ラス・ラヒータスI遺跡（Las Lajitas I）、サン・アントニオ遺跡（San Antonio）について、測量を行い、詳細なマウンド配置図を作成した。後者は、著者らによって初めて登録された遺跡である。

上述のように発掘調査を実施することができなかったため、マウンドの建築の構造については表面的な観察にとどまり、未だ不明である。唯一、ラス・ラヒータスI遺跡で道路工事によりマウンドが破壊されて半裁されている場所を発見し、マウンド内部の状態についても多少の知見を得ることができた。

また、本調査の主要調査地であるフイガルパ市、クアパ市周辺からは離れるが、1998年にチョンタレス県ビジャ・サンディーノ（Villa Sandino）市所在のガロボ・グランデ遺跡（Garrobo Grande）と、2013年に南部大西洋岸自治地域（RAAS：Región Autónoma de Atlántico Sur）エル・アヨーテ市所在のエル・ガビラン遺跡（El Gavilán）を訪れた（図1）。

## 5. 本調査により得られた知見

上述したとおり、著者らが行った調査では15遺跡を踏査し、そのうち10遺跡は未登録のものであった（表1）。踏査した遺跡のうち表面採集した土器から、3遺跡についてはその年代を特定することができた。また、主要調査地域から離れた2遺跡の踏査も含めて本調査により以下のことが明らかになった。

(1) フイガルパ市周辺では、遺跡は河川沿いの低地や低い丘陵・台地だけでなく、その近くの高地（山頂、尾根）にも存在する。

(2) 一般的に、低地（河川沿い）の遺跡には小規模なものも含む多数のマウンドがあり、高地（山頂、尾根など）の遺跡には比較的規模の大きい少数のマウンドがあるというパターンが認識される。

(3) 少なくとも地表面を観察したところによれば、高地の遺跡では、土器片、石器、炭化物などの生活廃棄物はほとんど見られない。

(4) 高地の遺跡のマウンドは、使われている石材のひとつひとつが大きく、また石の密度が高く、わずかしか土が混じらない。このことから、実は高地の遺跡のそれらは「マウンド（montículo）」

というよりも「石積み（amontonamiento de piedras）」と呼ぶほうが適当かもしれない。

(5) ラス・ラヒータスI遺跡のマウンドに石造彫刻の基部と思われる石が残っていた。これは原位置をとどめていると推定できる。

(6) ラス・ラヒータスI遺跡にかんしては、これまでも報告が行われてきたが、この遺跡にはマウンドのほかに南北の軸に沿って、二列に並んで環状列石が存在することがわかった。

(7) マウンドの内部構造については、発掘調査を実施できなかったため詳細は不明であるが、道路工事により破壊されたマウンドの断面を観察する限りでは、未加工の石材をこれといった設計は無しに積み上げているだけのように見える。

(8) 上記マウンドとは全く異なったものがガロボ・グランデ遺跡で確認された。粗いながらも加工を施したと思われる石材を積み上げて、三段構成の階段状のピラミッドが造られている。

(9) エル・ガビラン遺跡では、約26のマウンドを地表面から確認し、それらのうち4つでは石材が用いられていることが明確に観察された。特筆すべきものとして、2つのマウンドの周辺に石造彫刻の破片が散乱していた。

**表１　踏査実施遺跡一覧**

| 遺 跡 名 | 海 抜 | | 年　代 |
|---|---|---|---|
| | | | |
| ・フイガルパ市周辺 | | | |
| ラス・ラヒータスI | 100m | | クアパ期 |
| ラス・ラヒータスII | 140m | 高地 | 年代不明 |
| リンコン・デ・ラス・アニマスI | 105m | 高地 | 年代不明 |
| リンコン・デ・ラス・アニマスII | 100m | | 年代不明 |
| エル・ヒカラル | 65m | | 年代不明 |
| エル・タンボール | 135m | 高地 | 年代不明 |
| セロ・クアペ | 480m | 高地 | 年代不明 |
| 1603-1 | 110m | | 年代不明 |
| 1603-2 | 145m | 高地 | 年代不明 |
| ラ・ペロナ（I-19） | 65m | | モノタ期（?）、クアパ期（*） |
| ラ・パチョナ（I-43） | 90m | | マヤレスI～マヤレスII、モノタ期 |
| ウガルデ | 180m | 高地 | 年代不明 |
| サンタ・リタ | 80m | | モノタ期（*） |
| | | | |
| ・クアパ市周辺 | | | |
| サン・ハシント（II-26） | 280m | | クアパ期 |
| サン・アントニオ | 535m | | クアパ期（*） |

・リンコン・デ・ラス・アニマスI遺跡と、遺跡名の後に（I-19）などの括弧内に記号がついている4遺跡はフランス人考古学者が1980年代にすでに調査している。
・年代の後に（＊）がついている遺跡は、著者らの調査により年代が判明した。
・「高地」と書かれたものは、著者が高地タイプの遺跡と分類したものである。
ただし、高地タイプとは近辺の河川沿いの低地との対照による。必ずしも絶対標高と対応するものではない。

## 6. 考察

F. ゴラン［Gorin 1990］ら、1980年代に調査を行ったフランス人考古学者らの関心は主として土器にあり、チョンタレス地方で100近くの遺跡について記述しているにもかかわらず、セトゥルメント・パターンにはほとんど言及されておらず、時期ごとの遺跡分布図すら提示されていない。おそらくは、踏査対象地域が当地方の全域を網羅するにはほど遠く、しかも年代を決定できる遺跡が少ないことから、セトゥルメント・パターンを論じるには時期尚早と判断したのだろう。ゴランが年代を決定している、あるいは推測している遺跡数は23 (註5)、報告者の踏査の表採土器で年代が明らかになった遺跡数は3である。チョンタレス地方には、多数のマウンドが確認されながら、地表面に全く遺物が見られない遺跡が多いという奇妙な現象が指摘されている［Lange et al. 1991:62］。フランス人考古学者らの研究を継承発展させるためには、踏査地域の拡大に加えて、表採で資料が得られない遺跡での試掘と年代決定が将来的に不可欠である。

このような資料的制約はあるが、ゴランの編年に沿って、各時期について、セトゥルメント・パターンを含めて概観すると以下のようになる。

・マヤレス（Mayales）I期、前500-200：1遺跡のみで人間居住、多彩色土器も出土。
・マヤレスII期、前200-後400：同1遺跡のみで居住確認。新しい土器型式が出現。
・クイサラ（Cuisalá）期、後400-800：2遺跡で人間居住が確認される。在地の土器型式が主流。
・ポトレロ（Potrero）期、後800-1200：6遺跡での居住が推定される。ニカラグア太平洋岸と共通する土器型式が増える。
・モノタ（Monotá）期、後1200-1550：前時代に比べ遺跡数が顕著に増加する。12遺跡で居住が推定される。ニカラグア太平洋岸と共通する埋葬法が出現。
・クアパ（Cuapa）期、後1400-1600：前時期と同様に遺跡数は多いが、土器型式はモノタ期と断絶している（モノタ期とクアパ期の150年間の重複については後述）。

これを踏まえて、興味深いいくつかの問題について詳述する。

### (1) 河川沿いの低地遺跡と山頂や尾根上の高地遺跡

上に述べたように、本調査で踏査地域を拡大したことにより、フイガルパ市周辺では、河川沿いの遺跡に加えて高地遺跡の存在が明らかになった（図2）。

クイサラ期（後400-800）からポトレロ期（後800-1200）では、エル・コバノ遺跡（図3、El Cóbano、マウンド数8、最大で直径約22m）とエル・タマリンド遺跡（El Tamarindo、マウンド数12以上、最大で長さ約30m）がこれら時期に属する。両遺跡とも河川の合流点に近い。両遺跡とも小高い丘が背後にそびえる。遺跡と丘の頂までの高度差はどちらの遺跡でも約100mである。エル・コバノ遺跡の背後のエル・タンボール丘陵の頂上では著者らがエル・タンボール遺跡（El Tambor、マウンド数4または5、最大で長さ23.5m）の存在を確認した（図4）。エル・タマリンド遺跡の背後の丘陵では、遺跡は未だ発見されていないが、今後のさらなる踏査が必要である。

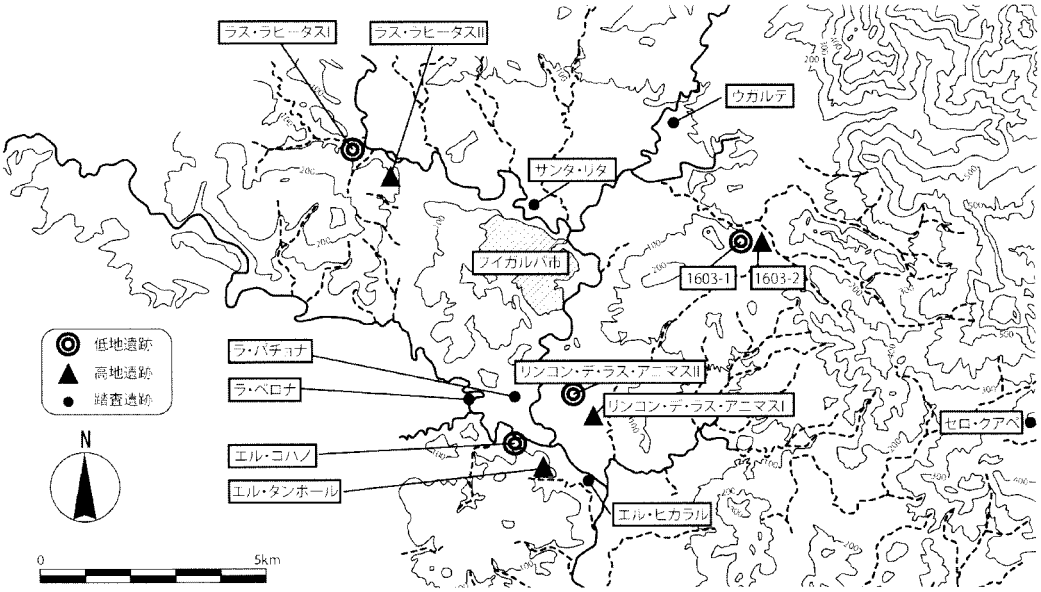


図２　フイガルパ市周辺　低地（河川沿い）と高地（山頂・尾根）の遺跡

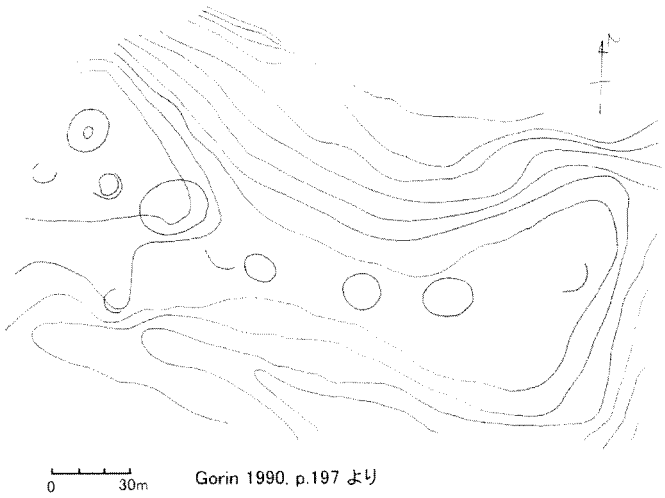


図３　エル・コパノ遺跡

図４　エル・タンボール遺跡

クアパ期（後1400-1600）の居住が確認できるラス･ラヒータスI遺跡（図5、マウンド数23、最大で直径14.4m）と年代は不明であるがラス･ラヒータスII遺跡（図6、マウンド数4、最大で長さ20m）の組み合わせも明らかにこのパターンに当てはまる。両遺跡の標高差は約40mである。

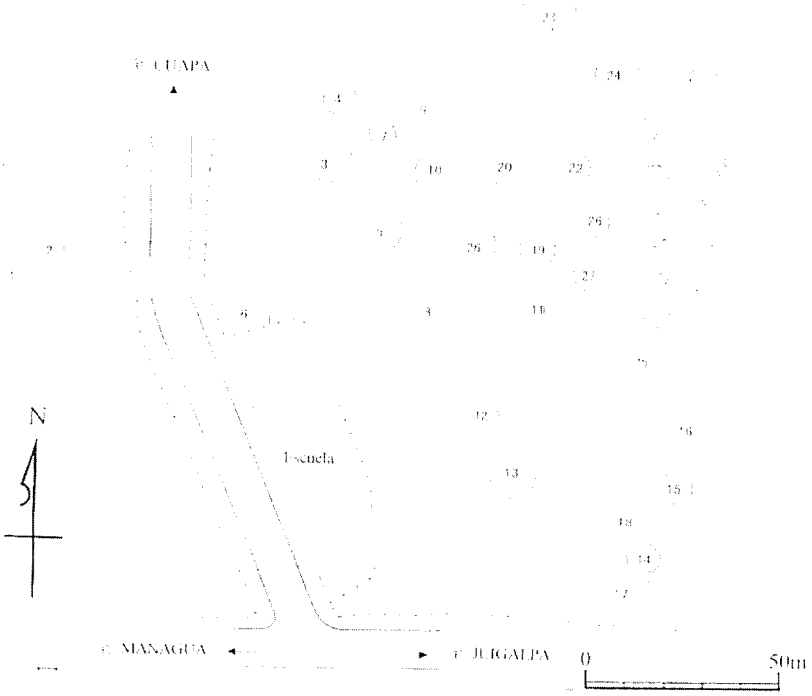


図５　ラス･ラヒータスＩ遺跡

図６　ラス･ラヒータスII遺跡

図７　チョンタレス地方の石造彫刻
（フイガルパ市博物館）

河川沿いや丘陵斜面の低地の遺跡と背後の小高い丘の頂の高地の遺跡という組み合わせとしては、リンコン･デ･ラス･アニマスI遺跡（Rincón de las Animas I、マウンド数8、最大で直径約20m）とリンコン･デ･ラス･アニマスII遺跡（マウンド数4または5、大きさは不明）がある。また1603-1遺跡（マウンド数23以上、比較的小型のものが多い）は低い台地上にはあり、1603-2遺跡（マウンド数1、最大で長さ15m）は、その東の丘陵斜面にある。1603-2遺跡は、平野を見下ろすことができ、高地の遺跡と分類できる。これらの遺跡では標高差はさほどではないが、少なくとも踏査を行った際には、低地の遺跡と高地の遺跡が近接するという印象を得た。

チョンタレス地方の高地（山頂･尾根）遺跡はどのような性格を持つのか。少なくとも地表面には土器片などの生活廃棄物は見られない。高地遺跡の様相を呈する1603-2遺跡が、必ずしも防御に適していない丘陵斜面にあることを考えると、これら遺跡は防御的な集落ではなく、埋葬場所、宗教施設など象徴的な意味あいを持っていたようにも見える。ただし繰り返し強調されるべきは、管見する限り、著者らの踏査を除いてこれら遺跡では科学的な調査が行われた記録はなく、その年代や性格については依然不明である。防御の必要にかられて営まれた居住地という解釈の余地も依然として排除はできない。

(2) チョンタレス地方の石造彫刻類の年代と分布

フイガルパ市の博物館、学校、個人の住居で所有されている石造彫刻類は、チョンタレス地方の先スペイン期の考古学資料の中でも特に注目を集める（図7）。それらは、当該地域で考古学的な関心が高まる以前にすべて遺跡から持ち出されたものと考えられ、もともとの所在遺跡についての情報は著者らが調査を開始した時点ではほぼ皆無であった。

これにかんして、近年重要な知見が得られた。現在大部分の石造彫刻類が博物館に集められているフイガルパ市から約100km東北東に所在する南部大西洋岸自治地域、エル･アヨーテ市のエル･ガビラン遺跡ではオランダ人考古学者らが2009年から調査を行っており、26のマウンドが確認され、そのうちの2つのマウンドの周辺では、チョンタレス地方と同様式の石造彫刻やその破片が多数発見された［Geurds 2011］。

図８　エル・ガビラン遺跡
（マウンドと石造彫刻破片）

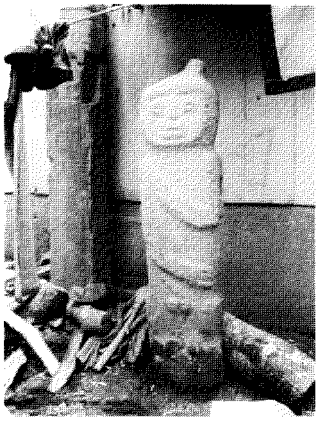

図９　エル・ガビラン遺跡
（民家に移設された石造彫刻）

今回調査でも2013年8月に同遺跡を訪れた。著者が確認したところによると、遺跡中心部に位置する4つの大型のマウンドは石を積み上げたことが確認できる。直径は最大マウンドが25m程度である。他のマウンドは土のみの築造か、石材を使用しているか、植生のため判然としない。2つのマウンドの周囲に完形と思われるものと破片、あわせて約40の石造彫刻類を確認した（図8）。これらは原位置を保っていると思われる。地表面に土器・石器などその他の遺物は観察されない。また、土地所有者の住居には完形の石造彫刻が2体移設されていた（図9）。

A.フールツは、この遺跡で試掘を行っている。土器型式から特定された年代については報告されていないが、採収された3つのサンプルでC14年代測定が行われ、前150-後780という数値が得られている［Geurds 2011:9］。ゴランの土器編年でいえば、概ねマヤレスII期（前200-後400）からクイサラ期（後400-800）に相当する。

一方、フイガルパ市の付近では、1998年のラス・ラヒータスI遺跡の踏査と測量調査を行った時点で、その一端が明らかになった。同遺跡では1つのマウンドで、あきらかに加工を施されている立方体の石材が地表面から約70cm突出しているのが発見された（図10）。これは、石造彫刻あるいは石柱の基部のみが原位置に残っているものと推定される。ラス・ラヒータス遺跡の年代については、ゴランはクアパ期（後1400-1600）の土器を確認している［Gorin 1990:194-195］。

エル・ガビラン遺跡における発見により、チョンタレス地方の石造彫刻が、往時どのような姿だったのかについて、貴重な知見が得られた。同遺跡での観察により、多数の石造彫刻がマウンド建築を取り囲む形で建立されていたという、これまで知られていなかった事実が初めて分かったのである。周辺における生活廃棄物の希薄さからは、この遺跡が居住地ではなく祭祀的な場所で、定期的に石造彫刻の建立に携わることで諸共同体間のつながりを維持する機能を持っていたという仮説も提示されている［Geurds 2011:9-10］。また、エル・ガビラン遺跡はフイガルパ市やクアパ市の諸遺跡からは約100kmも離れており、石造彫刻類の分布はニカラグア内陸部で予想外に広範囲におよんでおり、いまだ未発見のものが多数存在するであろうことが強く推定される。ただし、その年代についてはエル・ガビラン遺跡で得られたC14年代とラス・ラヒータスI遺跡で得られた土器からの推定

年代には齟齬が生じており、未だ明らかではない。また、エル・ガビラン遺跡のマウンド周囲に複数の石造彫刻が散在するという状況に対して、ラス・ラヒータスI遺跡はマウンドの石に混じって石造彫刻基部と思われるものが突出しており、この点でも状況が異なる。

いずれにせよ、これら石造彫刻類はチョンタレス地方の先スペイン期文化を特徴付けるものであり、その分布と年代の確定、そしてその性格の同定が課題である。

(3) ガロボ・グランデ遺跡について

チョンタレス地方の先スペイン期遺跡を特徴付けるのは数多くのマウンドであるが、これらは現状では円形、あるいはまれに長円形の外観を呈している。著者らが発見したサン・アントニオ遺跡では72のマウンドが見られ、測量の結果、チョンタレス地域最大級の規模の長さ約40mの長円形のマウンドが確認された（図11）。その他の遺跡で一般的に見られる円形のマウンドでは最大級のもので直径30m程度である。当然これらは、長年の間に崩れて水平方向に広がり高さも減じたもので、高さ3mを超えることはまれである。

図 10　ラス・ラヒータス I 遺跡、マウンド 22、石造彫刻の基部

図 11　サン・アントニオ遺跡

図 12　ガロボ・グランデ遺跡

図 13　ガロボ·グランデ遺跡

マウンドの構造については考古学的発掘調査がなされてないが、上述のようにラス・ラヒータスI遺跡で建築工事により半裁され破壊されたマウンドの断面を観察する限り、未加工の石を土とともに乱雑に積み上げていると観察される。

このチョンタレス地方の通常のマウンドとは全く異なるものが、同地方のガロボ・グランデ遺跡に存在する。同遺跡は著者らが主たる調査を行ったフイガルパ市から約76km東のビジャ・サンディーノ市に所在する。1998年3月著者らはこの遺跡を訪れた。当時は道路状況が極めて悪く4輪駆動車を途中で放棄して馬で同遺跡に向かったために滞在時間を短縮せねばならず、測量等は実施できなかった。観察からは、粗いながらも加工を施した石材を積み上げた4つの大規模建築を確認でき、最大

のもので高さは約5mと推定された（図12、13）。おそらく方形の底面形を持つ三段構成の階段状ピラミッドであり、建造物の角と思われる部分も確認された。

その後、この遺跡のいくつかの建造物はニカラグア人の考古学者によって調査、修復されている。ただし、今日まで当該発掘・修復についての正式な学術的報告は全くなされておらず、その一端について今のところは新聞記事［Nuevo Diario 2003］によってしか確認することができない。同記事によれば、修復されたピラミッドはやはり三段構成の階段状であり、底面が40m×30m、高さは8mである。

加工された石材による階段状ピラミッドというメソアメリカ的文化要素が、周囲から孤立して突然ニカラグア内陸部に現れることは非常に興味深い事実である。この現象を解釈するために、さらなる科学的調査とデータの公表が待たれる。

## 7. おわりに

最後に、以上の議論を著者が興味を持つチョンタレス地方と他地域との関係という視点から見てみたい。1980年代以降のニカラグアを含む中央アメリカ南部の考古学の動向について、著者は、かつての伝播論に対する反動から、逆の解釈の選択肢としての在地発展論を強調する傾向があることを指摘した［長谷川 2001］。チョンタレス地方も、独自の様式の石造彫刻が存在する点でも、多くの在地の土器型式にかんしても、隣接するニカラグア太平洋岸とは明らかに異なった地域であるという印象を受ける。しかし、チョンタレス地方があたかも閉じられた一つの「文化圏」であるかのように独自の発展を遂げているわけではないことは論を待たない。

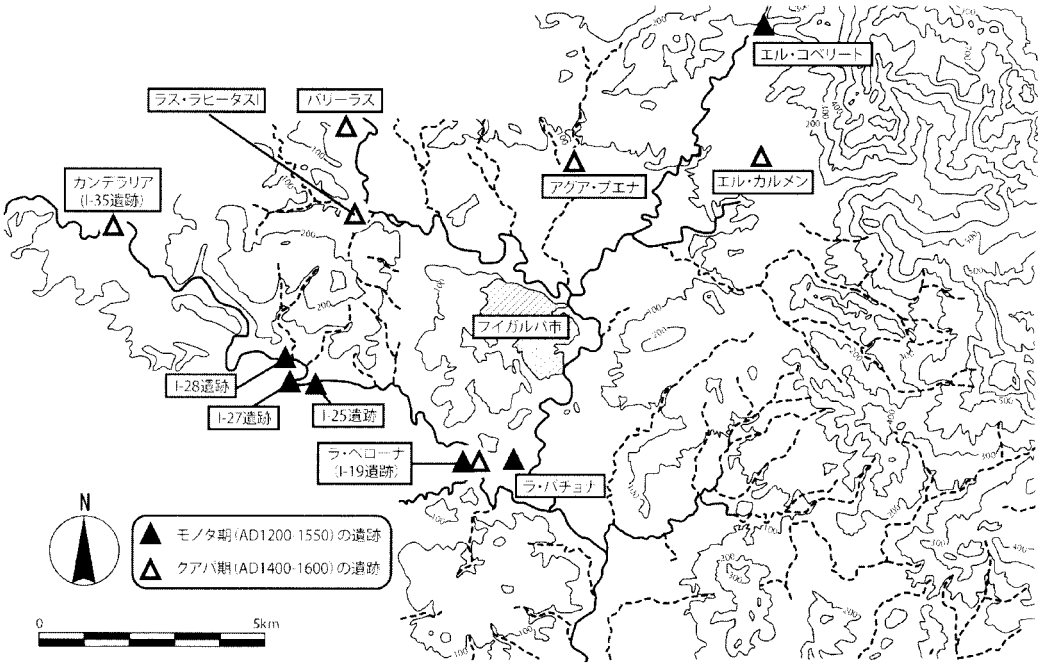


**図 14　フイガルパ市周辺のモノタ期とクアパ期の遺跡分布**

まず、河川沿いの低地の遺跡とそれに近接した高地の遺跡という組み合わせについては、他の地域でも類例が見られることを指摘しておきたい。ニカラグア北部、ホンジュラス国境にほど近いヌエバ・セゴビア地方でもこの現象が報告されている［Espinoza P.,E., L.Fletcher y R. Salgado G. 1996］。ホンジュラス中西部では古典期終末期（後800-1000）に河川沿いの低地の遺跡の放棄と高地の要塞遺跡の建設という現象があったことが知られている［Agurcia 1986; Henderson 1988; Joyce 1991］。この問題について本稿で取り上げたチョンタレス地方の遺跡のなかには、表採資料の年代が分かっている遺跡がいくつかあるだけで、高地の遺跡については年代が全く分かっていない。そうである以上、これがメソアメリカ全体の古典期から後古典期への移行時の混乱を反映するという仮説は憶測の域を出ないが、追究する価値のある課題である。

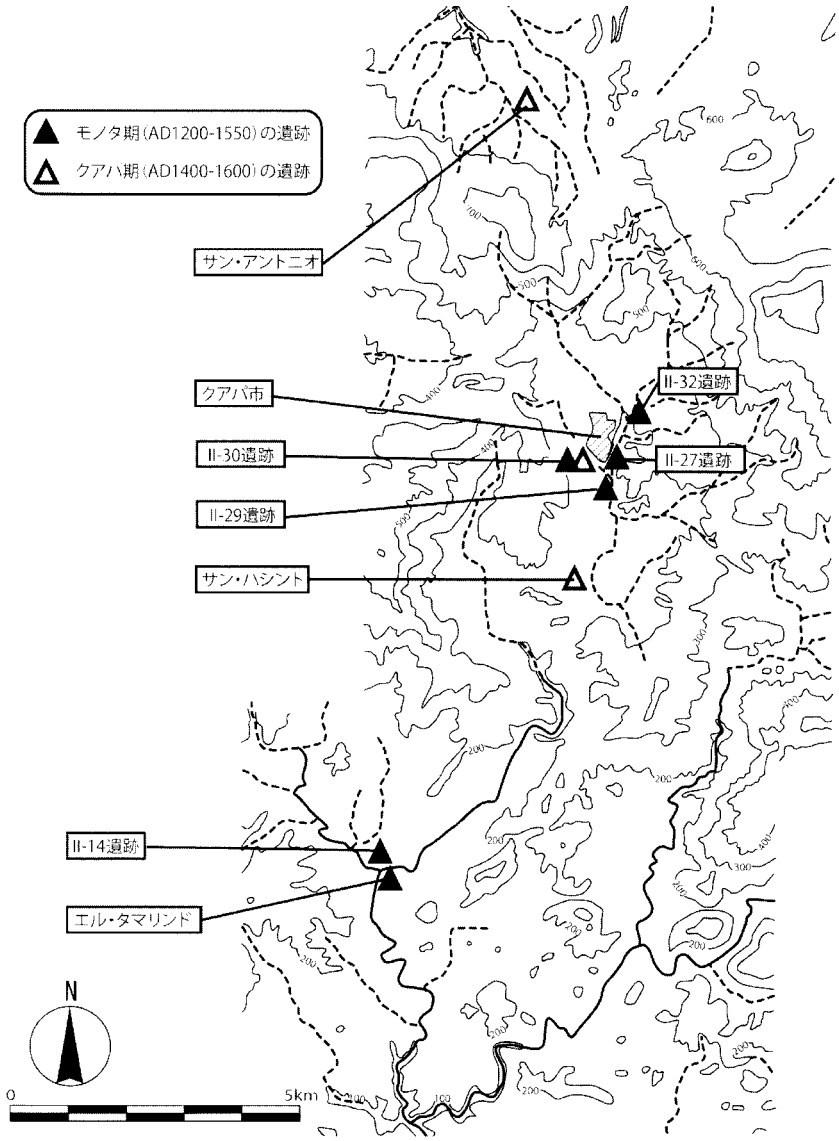


図 15　クアパ市周辺のモノタ期とクアパ期の遺跡分布

ニカラグア内陸部での階段状ピラミッド建築というきわめて例外的な存在とも受け取れるガロボ・グランデ遺跡にしても、他に全く類例が無いわけではない。伝統的な地域区分ではメソアメリカ「圏外」とされていたホンジュラス東部でもいくつかの遺跡は、典型的なメソアメリカの建築パターンを示している［Haseman and Lara Pinto 1993:167-171］。当然のことながら、地図上に線を引いて文化の境界を設定することは不可能であり、人やモノ、アイデアの絶え間ない移動という歴史動態を復元する必要がある。

年代的にはスペイン人の到来時とその直前にあたるチョンタレス地方のクアパ期（後1400-1600）について、ゴランはクアパ期の土器が胎土も成形も粗く、器形のバリエーションも急激に減少し、それ以前の時期からの連続性を保つモノタ期（後1200-1400）の土器とは明らかに異なる製作伝統に属するとする。また、試掘や表採で得られたデータから両者は一定期間共存しながらも、クアパ期はモノタ期よりも遅れて開始し、スペイン人侵入後にも続くとする。ただし、モノタ期とクアパ期が重複するというゴランの編年のもととなっているのはある1遺跡での表採で得られた土器資料のみで、根拠は弱いといわざるを得ない。

ところで、著者らが行った踏査で発見された大規模遺跡であるサン・アントニオ遺跡をはじめとして、クアパ期の遺跡は河川の上流部か、さらに分水嶺を超えた大西洋側斜面に所在し、明確とは言えないまでもモノタ期の遺跡とは排他的な分布傾向を示す（図14、15）。このような事実が外部からチョンタレス地方への異民族集団の移住を表しているのかどうかは興味深い。またそのような移住があったとして、その背景にあるのは、後古典期もかなり遅い時代にニカラグア太平洋岸に侵入したとされてきたナワ語系の集団であるニカラオなのか[註6]、あるいは実際にはクアパ期はスペイン人侵入以降であり、クアパ期の土器を製作した人々を河川の上流や大西洋岸斜面に押し出しているのは、スペイン人の征服活動なのか、解釈の選択肢は分かれる。

最終的に結論を出すにはデータを蓄積しなければならない。いずれにせよ、チョンタレス地方を含むニカラグア内陸部の文化史は未だ混沌としており、将来的にデータを蓄積することによって先スペイン期、あるいは植民地時代初期をも含めた民族移動、文化接触・変容というテーマに迫ることのできる材料を提供してくれるだろう。

【謝辞】

本論は平成21～25年度科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（領域代表：青山和夫）の成果の一部である。著者は、この研究に平成24年より研究分担者として参加している。

註

（註1）　1998年の調査には著者の他に橋下英将（京都大学文学部学生、当時）フォード・ホッファーバース（コロラド大学人類学部学生、当時）の二人が調査員として参加した。

（註2）　当時、ニカラグア文化庁の法律解釈と慣例では、考古学調査を実施するためには、文化庁と遺跡所在地の土地所有者の許可が十分条件となっていたが、地元自治体が調査許可には自らが関与すべきであることを強硬に主張した。また、調査許可書の文面でprospección（踏査）とされるべき箇所がexcavación（発掘）と誤記されていたことが、著者らが金鉱の採掘を行うのではないかという地元民の誤解を生んだ。詳述はしないが、

内戦の終結から日が浅く、国内的な対立が十分に解消されていないというニカラグアの特殊事情もこの件の遠因だったと著者は推察している。

（註 3） 1998 年の調査結果は、未刊行であるが Hasegawa,E.（1998）"Informe del Proyecto Arqueológico Chontales II". Manuscrito presentado para la Dirección de Patrimonio Cultural, Instituto Nicaragüense de Cultura.としてニカラグア文化庁のアーカイブに収録されており、また2003年11月19日に開催された第8回古代アメリカ学会研究大会で口頭発表された。

（註 4） 本稿でもちいられた図と写真は、図 3 の「コバノ遺跡」を除いて、すべて著者らの測量、撮影、作成によるものである。

（註 5） 年代が決定あるいは推測された 23 の遺跡には、本稿で取り上げるフイガルパ市とクアパ市周辺からは距離的に隔たったものが含まれる。

（註 6） 従来の編年では、ニコヤ文化圏の先スペイン期編年の最終時期に当たるオメテペ期（後 1300-1550）がニカラオの移住の年代と想定されてきたが、近年の発掘調査と C14 年代測定結果を受けて、この年代、あるいはオメテペ期の存在までが見直しの対象となっている［McCafferty 2010; McCafferty and Steinbrenner 2005］。

## 参考文献


Agurcia, R

1986 Late Classic Settlement in the Comayagua Valley. In *The Southeast Maya Periphery*, N. Hammond editor, pp.262-274. University of Texas Press, Austin.

Espinoza P.,E., L.Fletcher y R. Salgado G.

1996 *Arqueología de Las Segovias: Una Secuencia Cultural Preliminar.* Instituto Nicaragüense de Cultura, Organización de los Estados Americanos, Managua.

Espinoza,P.,E y D.Rigat

1994 Gran Nicoya y la Región de Chontales, Nicaragua. *Vínculos* 19 (1-2): 139-156. Museo Nacional de Costa Rica, San José.

Geurds, A.

2011 Materials and Materiality of Megalithics in Nicaragua. Paper prepared for the 2011 Annual Meeting of the SAA, Sacramento, CA.

Gorin, F.

1990 Archaeologie de Chontales, Nicaragua. Thèse de Nouveau Doctorat présentée devant l'Université de Paris I.

長谷川悦夫

2001 「伝播か在地発展か—1980年代の中央アメリカ南部考古学の動向—」『古代アメリカ』5: 1-22。

Haseman, G. y G. Lara Pinto

1993 La zona central: Regionalismo e interacción. In *Historia general de Centroamérica tomo I: Historia Antigua.* R. Carmack editor, pp.135-216. Sociedad Estatal Quinto Centenario, Madrid.

Henderson, J.S.

1988 Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Sula. *Yaxkin* XI (1): 5-30. Organo de Divulgación del Instituto Hondureño de Antropología e Historia.

Joyce, R.A.

1991 *Cerro Palenque: Power and Identity on the Maya Periphery.* University of Texas Press, Austin.

Lange, F. W. , P.Sheets, A. Martinez, and S. Avel-Vidor

1991 Archaeological Zones of Pacific Nicaragua. *The Archaeology of Pacific Nicaragua.* University of New Mexico Press.

Lothrop,S.K.

1926 *Pottery of Costa Rica and Nicaragua. 2 vols.* Museum of American Indian, Heye Foundation, Contribution 8.

McCafferty, G.

2010 Ten Years of Nicaraguan Archaeology. Paper prepared for the 2010 Meeting for American Archaeology.

McCafferty, G. and L. Steinbrenner

2005 Chronological Implications for Greater Nicoya from the Santa Isabel Project, Nicaragua, *Ancient Mesoamerica* 16: 131-146.

Nuevo Diario

2003 Asombro de los expertos por Pirámides nicas. （ニカラグア日刊紙 2003 年 6 月 15 日の記事）

Rigat, D y F. Gorin

1993 Proyecto Chontales: *Informe final.* In *30 años de arqueología en Nicaragua.* J. Arellano editor, pp.197-102. Museo Nacional de Nicaragua. Managua.

Squire, E.G.

1860［1989］ *Nicaragua: Its People, Scenary, Monuments and the Proposed Interoceanic Canal.* D.Appleton & Co., New York. (*Nicaragua: sus gente y paisajes,* traducido por L.Cuadra, Nueva Nicaragua Editorial, Managua.)

原稿受領日　2013年９月25日
原稿採択決定日　2013年10月16日